けん玉発祥の地である廿日市市。
国内外のけん玉プレーヤーがその技を競う
「けん玉ワールドカップ」が、
7月12日・13日、あいプラザで開催された。
選手村の宮浜温泉や会場隣のけん玉公園では、
選手のパフォーマンスなども行われ、
ダイナミックな世界の技に、会場が揺れた——。

Kendama World Cup Hatsukaichi 2014

けん玉 ワールドカップ 廿日市 2014

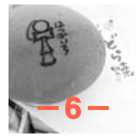

写真__1・8　選手村となった宮浜温泉で、７月11日に行われた前々夜祭。大野西小学校２年生を招いて選手たちのパフォーマンスが行われ、児童たちは世界の技に歓声を上げた。　写真__2　広島県西部木材青年協議会による巨大けん玉。通常の約15倍の大きさで全長2.7m、総重量は80kg。　写真__3　会場に飾られたけん玉の切り絵。　写真__4　ステージで行われたけん玉ずもう。　写真__5　７月12日、予選の様子。国や地域の異なる３人がコミュニケーションをとりながら、予選を進めていった。　写真__6　イベント会場で販売されたハングマーサンの「はつかいちけん玉どら焼き」。けん玉ワールドカップを機に考案された。　写真__7　ステージでは、選手がその技を披露し、多くの観客の目をくぎ付けにした。

聖地でのワールドカップ

けん玉の「聖地」廿日市が揺れた——。

7月12日・13日、けん玉の技を競い合う初の「けん玉ワールドカップ」が、あいプラザで開催された。国内や米国、カナダ、デンマークなど11の国と地域から110人が参加。会場は熱気に包まれ、観客はダイナミックな世界の技に酔いしれた。

開会式で眞野勝弘市長は「一度は途絶えたけん玉文化がここまで復活したのは、その製造や普及に携わってきた人のおかげ。そういった人たちに感謝したい」とあいさつ。会場に隣接したけん玉公園（新宮中央公園）には、特設ステージが設けられた。

ステージでは、選手のパフォーマンスやライブが繰り広げられ、訪れた人はその技に歓声をあげた。

また、市内の小中学生や「全国車いすけん玉倶楽部」が日ごろの練習の成果をステージで発揮。来場者が参加できるけん玉相撲も行われた。

会場には日本を含め、世界で作られたけん玉の販売やけん玉の貸し出しがあり、実際にけん玉を手にとる人も多く、中には、ワールドカップ出場者に手ほどきを受ける人も見られた。

12日に行われた予選会では、選手は難易度別に分かれた技のリストから5つの技を選択。180秒の制限時間内で成功した技の合計ポイントを競った。

選手たちはこの日、ランダムに決められた3人1組のチームになり、互いの技の審査も行う。予選の結果、13日の決勝に進出したのは20人。国内選手9人と海外選手11人が勝ち残った。

13日の決勝は、技の数の制限はなく、180秒の制限時間内に成功した技の得点を競った。決勝からは、審判による審査とともに、ビデオ判定も導入し、公正なジャッジのもと、熱い戦いが繰り広げられた。

決勝での得点は技の難易度の二乗となり、大きな差が出てしまう。難易度1の技なら1点、難易度4なら16点、難易度10なら100点だ。そのため、選手は難易度の高い技をリストに組み込んでいく。

身動きができないほどの観客が集まった会場は、大技が決まるたびに大歓声に包まれた。

予選・決勝の会場だけでなく、その周辺でもけん玉を持った人たちでにぎわい、2日間の来場者は市内外から3万8000人を数えた。

写真__9　予選終了後、七夕まつりが開催されている「けん玉商店街」へ移動し、再びパフォーマンスを開始。特設ステージにはけん玉パフォーマンスコンビの「ず～まだんけ」も登場。商店街の店舗ではけん玉メニューが販売された。商店会会長の原田智之（はらだ・ともゆき）さんは「昨年の２倍以上の人出です。これをきっかけに海外の人を含め、地域の人にけん玉商店街の良さが伝わっていけば」と話してくれた。　写真__10　地元廿日市出身で全国大会優勝経験者の久保田悟（くぼた・さとる）さんも参加。惜しくも決勝には進めなかったが、その技をステージで披露した。　写真__11　前々夜祭では選手との触れ合いも多く見られた。参加選手に指導を受けた細川陽希くん（ほそかわ・はるき　写真左）は、「保育園のときからけん玉をからやっています。今日は楽しみにしてきました」と話してくれた。写真__12　予選１位で通過したボンズ・アトロン選手（米国）。その高い技術で会場を沸かせた。